

翼を広げた森林ボランティア

特定非営利活動法人 庄内海岸のクロマツ林をたたえる会
事務局長 高橋弘哉

1 課題を取り上げた背景（発端）

庄内砂丘は山形県の西部、日本海に面し、北は遊佐町吹浦から南は鶴岡市湯野浜に至る延長約33km、幅1.5～3km、面積約7,000haに及ぶ長大な構造物で、規模から見ても日本有数の砂丘を形成しています。

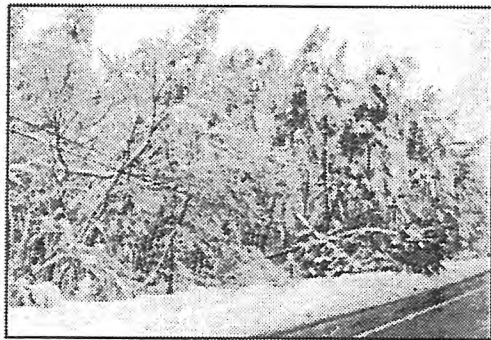
東北の秀峰、鳥海山を仰ぎ、日本三大急流、最上川の北側に位置する海岸林は、昭和40年代中盤の酒田北港の開発で大規模な伐採がありました。

最上川の南側の海岸林は、庄内空港をはさみ、列状林帯が見事です。750万本を越えるクロマツ林が日本海から吹く強烈な北西の風を遮断し、豊かな庄内平野穀倉地帯の防壁となっているのです。

松林はそこにあるのが当たり前と思っていた庄内の人々の目が一斉にクロマツに注がれた大事件が起きました。

平成10年11月17日～19日の湿ってドカ雪により数千本のクロマツが折れたのです。それは雪のせいだけではなく手入れ不足による松の弱さも原因だったのです。

初代会長の桜井輝夫氏は、観光面から松林に関心を持っていましたが、これを契機に独自に松林を研究、植林の歴史、観光資源としての可能性、手入れの大切さを訴えてきました。



やがて輪が広がり、平成13年3月から勉強会を重ね平成13年11月12日、庄内海岸のクロマツ林をたたえる会が設立されました。このころの桜井氏は寝食を忘れ「クロマツ」に没頭していたと言えます。設立の目前、10月18日、奇しくも酒田市が主催した「松原サミット」終了後、脳梗塞に倒れます。しかし、今尚、必死のリハビリを行いながら「クロマツ」への情熱は変わることはありません。

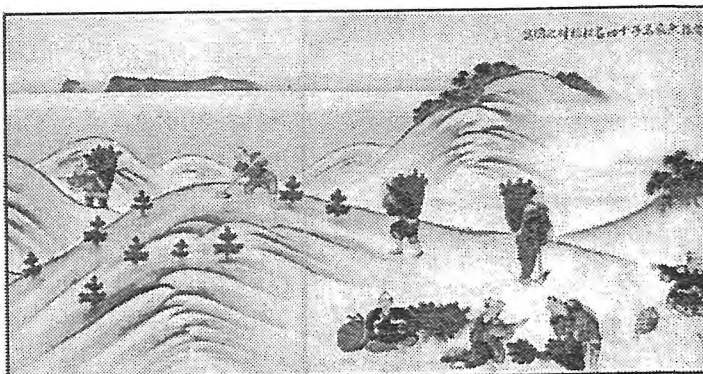
「たたえる」とは、松林に懸けた先人の偉業、森林管理に努める関係者の苦勞、身を呈して地域住民を守り続けるクロマツ林、この三つを「たたえる」という意味が込められています。

2 過去から未来へ

ここで植林の歴史とそれに携わった群像を振り返って見ましょう。

次頁の絵図は、遊佐町吹浦、曾根原家に伝わる植え付けの絵図です。右側で指図をするのが曾根原六蔵、450万本もの植え付けをしたと言われています。

これより先、六蔵の伯父、佐藤藤蔵は、酒田から遊佐町藤崎に移り住み、85歳で没するまで生涯を植林に捧げ「一枝を折らば我が一指を折れ、一木伐らば我が一手を絶て」との家訓を残し、その子孫もまた代々植林に尽くしたのです。



藤蔵、六蔵のみならず、1700年代から本格的に始まった庄内砂丘の植林。多くの先人が公益の精神で取り組み、幾多の困難を乗り越え、200年を経て不毛の砂地に「緑」が蘇ったのです。

なぜ人々は植林に取り組んだのか、その背景には、飛砂や洪水を防ぐためには勿論のこと、生活に欠かせない燃料を確保するため等、様々な要因が考えられます。

しかし、ようやく形づくられた砂防林は、第二次世界大戦の混乱で放置、乱伐され、戦後砂防林は荒廃を極めます。

ひとたび風が吹けば飛砂の被害は甚大で、家の中で傘をさす生活もありました。右図のように食事も傘さして飛砂の中の食事です。



そんな飛砂被害に困窮した住民を救うため、昭和25年、国営の海岸砂地造林事業が開始されます。この陣頭指揮をとったのが富樫兼治郎、当時の酒田営林署長です。

大きな業績を残し、「海岸砂防の父」と呼ばれています。

この富樫署長に植林砂防を行うために採用されたのが須藤儀門氏です。昭和55年「砂防林物語」を出版、平成3年には高山樗牛賞を受賞、昭和の砂防植林に全霊を捧げ、庄内砂防林の歴史を後世に伝えています。

3 活動の経過

しかし、燃料革命など生活様式などの変化によって人と森林との関わりが次第に薄れ、更に松くい虫被害の発生も広がり、こうした状況を憂い、先人から受け継いだ貴重な遺産であるクロマツ林を未来の子供達に健全な形で引き継いでいこうとする森林ボランティアの活動が近年活発になってきました。

「今、出来ることから始めよう！」

そのフィールドは無限にあります。当会は、行政と協働した枝打ち、下刈りなどの森林整備活動の他にクロマツ林の大切さを広く伝えるための啓発活動として各種の事業を主催しています。

平成14年6月

～先人の遺業を温ね、クロマツを知る～

「庄内クロマツ講座」全4回、参加43名

平成15年6～7月

～よみがえれ白砂青松・庄内砂丘と海岸林…その歴史と未来～

「庄内クロマツ大学」全5回、参加50名

そして、クロマツ林を守り育てていく機運を住民運動として盛り上げていくため、平成16年10月30日「クロマツシンポジウム」を開催しました。

～出羽庄内公益の森づくりを考える～をサブテーマに産官学民、参加311名を数えました。

その反響は大きく、今後も継続的な運動とするため、平成17年11月19日(土)「第2回クロマツシンポジウム」を開催致します。



4 現状と課題

南北33kmの広大なクロマツ林を健全に保全育成していくためには、行政、森林関係団体を柱とし、ボランティア団体と地域住民がそれを支える土台となることが重要と考えます。

砂丘地砂防林環境整備推進協議会(遊佐)、万里の松原に親しむ会(酒田)、飯森山の緑と景観を考える会(酒田)、「森の人」講座(鶴岡)など各地にボランティア団体が誕生し、秋田県由利地方との交流も始まっています。

山形県庄内総合支庁では、平成14年度より出羽庄内公益の森整備事業をスタートさせ、森林整備に関わる団体を網羅した「出羽庄内公益の森づくりを考える会」が情報交換の役割を果たしています。また、森林ボランティアへの支援についての話し合いの場も設けています。

森林保全への社会の関心の高まりと共に森林ボランティアへの協力要請も年を追う毎に増えてきました。当会は、台頭してきた各森林ボランティアのコーディネーターの役割を果たし、今後益々の活動の充実を計るため平成15年6月、NPOの認証を受け、同年11月認証祝賀会を行い、現在一般会員111名、賛助会員38名、計149名の会員を有しています。

しかしながら、それを維持していく予算収支面の不安定さ、事務作業の負担増加、会員の伸び悩みと高齢化・固定化などの慢性的な課題を抱えています。

これは、あらゆる森林ボランティアの共通の課題と言えます。

5 今後の展開

森林ボランティアは、ノコギリや鎌を持った地道な整備活動を行うと共に、森林を守り育て次代に引き継いで行こうとする心を繋いでいく活動です。

庄内の海岸林は、日本海の烈風と飛砂から私達を守り続けてくれるだけでなく、環境保全、景観保全そして私達の心身の健康保持にまでその役割を広げています。

更に最も新しい役割として、子供達に社会教育の場をも提供しています。小学校、中学校、高等学校の森林整備活動も広がってきました。爽やかな達成感を味わう瞬間です。



庄内の海岸林は、庄内地域の特性を形作る大切な要素となっています。そしてそれは、先人が遺した業績の上に成り立っています。

今後私達は、平成の先人として、貴重な植林の歴史や資料を長く保存開示すると同時に庄内海岸のクロマツ林を守り育てていく活動を推進しなければなりません。



大きく翼を広げた森林ボランティアではありますが、まだ翼は弱いのです。羽ばたきがより力強いものになるように、行政、森林関係団体の一層の指導協力をお願いしたいと思います。

そして、昔、風に飛ばされながらも1本1本苗を植えたように、私達の心の中にクロマツ林を守り育てる心の苗を一つ一つ根気よく植えようではありませんか。